

即応輸送、長年の訓練成果を発揮:スーパー台風「シンラコウ」被災地支援へ *Years of practice, days to deliver: 374 AW responds to Super Typhoon Sinlaku*

June 1, 2026

By Senior Airman Tallon Bratton
374th Airlift Wing Public Affairs

ここ数週間にわたり、第374空輸航空団の空兵は、スーパー台風「シンラコウ」被災地の行政当局支援のため、グアムへ支援要員と航空機を派遣した。支援活動では、太平洋の離島へ長年にわたり食料や物資を届けてきた「クリスマス・ドロップ作戦」で培った経験が活かされた。

台風の影響により、北マリアナ諸島では住宅の浸水や電柱の倒壊、建物の屋根損壊などの被害が発生。また、グアムやロタ島でも豪雨や突発的な洪水、広範囲にわたる停電被害に見舞われた。サイパン、テナン、ロタ各地の初期被害額は、数億ドル規模に上ると見込まれている。

台風がグアムを直撃し、周辺の北マリアナ諸島地域にも激しく被害をもたらしたことを受け、戦争省米軍部隊は連邦緊急事態管理庁(FEMA)や地元当局による災害対応を支援した。統合任務部隊マイクロネシアが全体調整を担い、その中で横田基地の空兵は、支援要員や物資を被災地へ迅速に輸送する重要な役割を果たした。

第36空輸中隊のC-130Jスーパー・ハーキュリーズ教官操縦士であり今回の航空団派遣運用責任官のミランダ・バプティ少佐は、「通常、この規模の輸送作戦は数週間かけて綿密に計画する。しかし今回は、その時間的余裕はなかった」と振り返った。

空兵は4月17日朝から飛行前の休養態勢に入り、深夜にグアムへ向けて出発した。アンダーセン空軍基地到着後、チームはロジスティクス緊急対応部隊の装備を搬出するとともに、地上でロジスティクス計画を継続しながらサイパンへの任務飛行を開始した。

こうしたスピードで民間当局支援任務を遂行するには、航空機や貨物だけでは不十分である。実際の任務を想定した訓練を積んだ空兵の存在が不可欠である。第374空輸航空団では、その経験の多くを毎年12月に行われている「クリスマス・ドロップ作戦」で培っている。

第374空輸航空団の日常的な訓練は、今回の台風被災地支援といった実任務への即応力を養っている。その訓練の一つが、クリスマス・ドロップ作戦である。この作戦は、戦争省で最も長く続く人道支援空輸任務であり、その歴史は1952年にさかのぼる。当時、WB-29スーパーフォートレスの搭乗員が、マイクロネシアのカピングマランギ環礁で手を振る島民に向け、支援物資をパラシュート投下したことが始まりだった。

現在では、横田基地第36空輸中隊のC-130Jスーパー・ハーキュリーズ搭乗員が、アンダーセン基地第36航空団や各国の同盟・友好国と連携し、毎年12月、マイクロネシアやパラオ共和国、北マリアナ諸島の離島へ、食料や工具、生活必需品など数百個の支援物資を空中投下している。

バプティ少佐は、「クリスマス・ドロップ作戦は、搭乗員だけでなく地上支援チームにとっても、技量を磨く最高の機会だ」と述べ、「柔軟性と判断能力を養うことができ、それは人道支援・災害救援任務の成功に不可欠だ」と強調した。

第374装備即応中隊戦闘機動小隊主任ジョーダン・ソジョット技能軍曹は、多国籍軍による「クリスマスドロップ作戦」の物資梱包チームを率いてきた。今回のスーパー台風「シンラコウ」の対応では、航空輸送要員3名とともに第36装備即応中隊へ加わり、サイパン、テナン、ロタ向け支援物資の備と搭載を担当した。

ソジョット技能軍曹は、「他国軍や他軍種とより円滑に意思疎通し、協力して任務を遂行する方法を学んだ」と述べ、「また、状況は常に変化するということ、計画通りに進まなくても過度に動揺しないことの大切さも学んだ」と語った。



彼にとって、12月の人道支援空輸活動と4月の被災地支援は共通しているという。「こうした任務に参加し、自分たちが人々の助けとなっていると実感できる任務は、自身のキャリアの中でも最もやりがいがある」とソジヨット技能軍曹は語った。

毎年12月の空中投下物資の準備から、4月の台風被災地向け救援物資輸送に至るまで、横田基地の空兵は、クリスマス・ドロップ作戦で培った経験を今回のスーパー台風「シンラコウ」被災地対応へ直接活かした。長年積み重ねてきた空輸経験を活かすことで、チーム横田は、戦争省で最も長い歴史を持つ人道支援空輸任務が、実際の人道支援や民間当局支援任務においても極めて有効な訓練の場であることを、改めて示した。